

第6回 概論 日本の近代文学とキリスト教

2019. 6. 14 篠崎美生子

1. 何が日本の「キリスト教文学」とされてきたか 資料①佐藤泰正

- ・キリスト教の信仰に関わった作家
北村透谷、島崎藤村、国木田独步、正宗白鳥、有島武郎、(賀川豊彦)
- ・キリスト教について書いた作家
(夏目漱石)、芥川龍之介、(堀辰雄)、(太宰治) ……だけ？

2. 近代日本のパラダイム形成にかかわったキリスト教

- ・信仰の有無とはかかわらず、聖書を読み、教会に行った作家たち
資料②志賀直哉「内村鑑三先生の思い出」 ③小山清「太宰治と聖書」
- ・語学の勉強と紙一重 ④島崎藤村「桜の実の熟する時」
- ・キリスト教がなければ「恋愛」はできない
資料⑤柳父章『翻訳語成立事情』 ⑥北村透谷「厭世詩家と女性」 ⑦田山花袋「蒲団」
- ・トルストイ受容
資料⑧柳富子『トルストイと日本』

3. せめぎあうクリスチャン表象

- ・あやしげな人 資料⑨坪内逍遙「内地雑居未来之夢」
- ・苦悩する人 資料⑩夏目漱石「三四郎」
- ・偽善者 資料⑪二葉亭四迷「其面影」
- ・セレブな人 資料⑫有島武郎「一房の葡萄」

4. リテラシーの向上とミッションスクールの役割

- ・「小説」というメディアの大衆化 資料⑬文科省 HP「学校系統図」 ⑭安藤宏
- ・賀川豊彦の爆発的人気 資料⑮林啓介
- ・ミッションスクール卒の教師たち 資料⑯『明治学院百年史』

5. 何がクリスチャンを「他者」にしたか

- ・極端な自己犠牲と選良主義 資料⑰篠崎
- ・特別な人のための宗教ではない 資料⑱遠藤周作「沈黙」

【資料編】 ※⑧中の引用文以外は、現代仮名遣いに改めてあります。

①佐藤泰正「近代文学と宗教」(三好行雄ほか編『日本現代文学大事典人名・事項篇』明治書院 1994)

近代文学の草創期にあって、みずからキリスト者として文学の自律性を説き、人間とは「有限と無限の中間に彷徨するもの」にして「文学は人間と無限とを研究する一種の事業なり」と説いたのは北村透谷であったが、透谷自身はもとより、彼に深く兄事した島崎藤村はじめ、後の作家たちによってもついにこの課題は達成されるどころとはならなかった。むしろキリスト教を「とつくにの神」として数年にして離教した藤村に、後の作家たちのたどる範型をみることができる。事実、木下尚江・岩野泡鳴・徳富蘆花などにみる仏教や古神道や日本の生命主義ともいべき世界への傾斜、正宗白鳥や有島武郎などの離教、背教の問題など、この汎神論的風土とキリスト教をめぐる対峙相克の根は深い。逆に夏目漱石・芥川龍之介・堀辰雄・太宰治など、キリスト者ならざる作家の系脈に、キリスト教思想によってこの神なき風土と土壌を問い返し、掘り起こさんとする試みがみられ、これは戦後の大岡昇平・大江健三郎などにもみられるところである。(以下略)

②志賀直哉「内村鑑三先生の憶ひ出」(1941)

もともと私が内村先生の所へ行くようになった初めはそれ以前から内村先生の書かれた物を読み、尊敬して行ったというのではなく、実は内村先生の名さえ知らず、その頃自家にいた末永馨という書生に勧められ、漫然出かけて行ったので、そんな弟子は内村先生にしては恐らく私一人であったろう。

明治三十三年、私は十八歳で、その夏、中学五年生になったが、何か私にも精神的な欲求があり、書生の末永君と一緒によく近所の霊南坂教会、或いはその他の教会に説教を聴きに行った。アメリカから来たモット博士という若い長身の牧師の「青年の誘惑」という露骨な説教などには問題が適切なだけに甚く心を打たれたりした。

③小山清「太宰治と聖書」(1958)

太宰は聖書をよく読んでいた。太宰が聖書を読むようになったのは、彼が東京へ出てきてから、そして非合法運動から退いてからのことだと思う。誰からすすめられたというわけでもなく、また誰の影響というわけでもなくて、自分から求めて読むようになったようだ。爾来、死ぬ間際まで聖書は太宰の座右の書であった。(原文は旧仮名遣い)

④島崎藤村『桜の実の熟する時』(初版 1919)

お婆さんは首を振って、「捨さんの学校は耶蘇だって言うが、それが少し気に入らない。どうもあたしはアーメンは嫌いだ」

「お婆さん、そう貴女のように心配したら際限が有りませんよ。今日英学でも遣らせようと言うには他に好い学校が無いんですもの。捨吉の行っているところなどは先生が皆亜米利加人です。朝から晩まで英語だそうです」と言って主人は捨吉の兄の方を見て、「どうかして、捨吉にも洋行でもさして遣りたいものですな——御店の大将もそういつてるんです——」

⑤柳父章『翻訳語成立事情』(初刊 1982)

この翻訳語「恋愛」によって、私たちはかつて、一世紀ほど前に、「恋愛」というものを知った。つまり、それまでの日本には、「恋愛」というものはなかったのである。(中略)

はじめに美しい女性がいる。遠くの方から現われる。男は、直ちにそれに近づいていこうとしないで、かえって遠ざかる。しかも生命を賭けた危険の方に向って行く。男は、冒険の果てに、やがてその美しい存在のもとへ帰ってくるのだが、その love の始まりの形にとくに注目したい。このような物語の背景には、マリア崇拜や、十字軍の遠征がある。つまりキリスト教が根本にある。(中略)

「恋愛」の流行は、まず「恋愛」という言葉の流行であった。そして、このことばによって支持され、勇気づけられた若い人々の間に、やがて「恋愛」という行為の流行として広まっていった。「恋愛」と流行させた人々は、知識人やその子弟に多く、とくにプロテスタント系クリスチャンや、その周辺の人が多い。

⑥北村透谷「厭世詩家と女性」(1892 年)

恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらんには人生何の色味かあらん、
(中略)

実世界は強大なる勢力なり、想世界は社界の不調子を知らざる中にこそ成立すべけれ、既に浮世の刺衝に当たりたる上は、好しや苦戦搏闘するとても、遂には弓折れ箭尽くるの非運を招くに至るこそ理の数なれ。此時、想世界の敗将気涙み心疲れて、何物をか得て満足を求めんとす、労力義務等は実世界の遊軍にして常に想世界を覗ふ者、其他百般の事物彼に迫って劍鎗相接爾す、彼を援くる者、彼を満足せしむる者、果して何物とかなず、曰く恋愛なり、美人を天の一方に思求し、輾転反側する者、実に此際に起るなり。生理上にて男性なるが故に女性を慕ひ、女性なるが故に男性を慕ふのみとするは、人間の価格を禽獣の位地に遷うつす者なり。(中略)

恋愛によりて人は理想の聚合を得、婚姻によりて想界より実界に擒せられ、死によりて実界と物質界とを脱離す。抑も恋愛の始めは自らの意匠を愛する者にして、相手なる女性は仮物なれば、好しや其愛情益発達するとも遂には狂愛より静愛に移るの時期ある可し、此静愛なる者は厭世詩家に取りて一の重荷なるが如くになりて、合歓の情或は中折するに至るは、豈惜む可きあまりならずや。(中略)

嗚呼不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通弁となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで、寝ねての夢、覚めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ、うたてけれ。「恋人の破綻して相別れたるは、双方に永久の冬夜を賦与したるが如し」とバイロンは自白せり。

⑦田山花袋「蒲団」(1907)

「お前たちのような旧式の人間は芳子の遣ることなどは判りやせんよ。男女が二人で歩いたり話したりさえすれば、すぐあやしいとか変だとか思うのだが、一体、そんなことを思ったり、言ったりするのが旧式だ、今では女も自覚しているから、為ようと思うことは勝手にするさ」

この議論を時雄はまた得意になって芳子にも説法した。「女子ももう自覚せんければいかん。昔の女のように依頼心を持っては駄目だ。ズウデルマンのマグダの言った通り、父の手からすぐに夫の手に移るような意気地なしでは為方が無い。日本の新しい婦人としては、自ら考えて行うようにしなければいか

ん」(中略)

今回の事件とは他でも無い。芳子は恋人を得た。そして上京の途次、恋人と相携えて京都嵯峨に遊んだ。その遊んだ二日の日数が出発と帰京との時日に符合せぬので、東京と備中との間に手紙の往復があって、詰問した結果は恋愛、神聖なる恋愛、二人は決して罪を犯してはおらぬが、将来は如何にしてもこの恋を遂げたいとの切なる願望。時雄は芳子の師として、この恋の証人として、一面月下氷人の役目を余儀なくさせられたのであった。(中略)

その夕暮、時雄は思切って、芳子の恋人の下宿を訪問した。

「まことに、先生にはよう申訳がありまえんのやけれど……」長い演説長の雄弁で、形式的の申訳をした後、田中という中背の、少し肥えた、色の白い男が祈祷をするときのような眼色をして、さも同情を求めるように言った。(中略) 麴町三番町通の安旅人宿、三方壁でしきられた暑い室に初めて相對した時、先ずかれの身に迫ったのは、基督教に養われた、いやに取澄ました、年に似合わぬ老成な、厭な不愉快な態度であった。

⑧柳富子『トルストイと日本』(早稲田大学出版部、1998)

通常、トルストイの名を冠してのもっとも早い紹介は蘇峰の主宰する『国民之友』に明治 23 (1890) 年 9 月から 10 月にわたって、上・中・下三度に分けて掲載された「露国文学の泰斗、トルストイ伯」ということになっているが、それより二カ月早い 7 月、『日本評論』の社説欄の「歐洲の文学」其二でトルストイが紹介されている。この雑誌は、横浜バンド系の植村正久が所属する日本基督一致教会が刊行していたもので、読者層を教会内に限定せず、政治、経済、文学、宗教などの論説や記事を含んでおり、植村正久は社説で自身の文学、宗教、さらには人生論を展開していた。

(中略)

伯は社会の預言者なり。真理を伝ふる天職を奉したる人なり。小説は其の予言を四方に伝へ、万民を教へんと欲するの手段に過ぎざるなり。伯は真実無妄熱心燃るが如く其口に説き、筆に唱ふる所は忌み憚る所なく至るところに実行せんことを試みるの人なり。口に佚楽安居を咎め、筆に一視同仁の大義を唱ふれば、自ら進んで農民の群に入り、糞土の間に起居し、手から耕耘に従事すと聞く。其節操の清冽貴ぶべきにあらずや。(中略) 日本のトルストイ何処にかある。

⑨漱石「三四郎」(1908)

「迷子の英訳を知って入らして」

三四郎は知るとも、知らぬとも云い得ぬ程に、此問を予期していなかった。

「教えて上げましょうか」

「えい」

「^{ストレイ、シーフ}迷える子——解って？」(五の九) ※イザヤ 53-6、エレミア 50-6、マタイ 18、ルカ 15

美祢子の会堂へ行くことは始めて聞いた。何処の会堂か教えて貰って、三四郎はよし子に別れた。横丁を三つ程曲ると、すぐ前へ出た。三四郎は全く耶蘇教に縁のない男である。会堂の中は覗いて見た事もない。(中略)

「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」※詩編 51-3

聞き取れない位な声であった。それを三四郎は明らかに聞き取った。三四郎と美祢子は斯様にして分れた。(十二の七)

⑩坪内逍遙「内地雑居未来之夢」(1886)

此の「ビゲー」さんというお医者ハ。並の西洋のお医者と違い。むかしの「キリシタン」の魔術のような。怪しい。気味の悪い術が上手で。折々薬取に参りし折。いやと申すのを聞入れないで。おまえを眠らして見せるから。ト何だか気味の悪い手附をして私の貌を睨むと。一体どうしたのか存じませんが俄に耐られなく眠くなって。即座に眠てこけて仕舞まして(中略) 今まで薬料も診察料もすこしも取らないで置いた事故スツカリ今日中に勘定しろ。若其勘定が出来ない事ならおみやを奉公に出せ。妾にかゝへたい。と申すンですヨ。

⑪二葉亭四迷「其面影」(1906)

私はこれから千葉へ行って、勝見様が世話をしてやると仰有いますから、バイブル・ウーマンという棚経読みの尼さんのようなものに成りとう御座いますと、古い隠居の耳にも分るように、嚙砕いて話をすると、ううう、勝美様とはお前のお友達の嫁づいている、アノソレ牧師とやらしていなさる・・・(三十八)

「まあ、待つて頂戴！」と凝つと恨めしように顔を視て、「姉さんは余り残刻だわ……」

俊子は立ち勝ち儼然となって、「ええ、私残刻よ。霊の小夜子さんは愛するけど、肉の小夜子さんには残酷よ。兄と名の附く人を現在の姉様と競争したり、別れた方が彼方の利益だと思っても、自分が可愛くって別れられなかったり、私其様手前勝手な小夜子さんなんぞ些とも愛する気はないわ。」

⑫有島武郎「一房の葡萄」(『赤い鳥』1920.8)

僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通っていた学校は横浜の山手という所にはありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。(中略)

「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰わなくてもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引張り出して強く握ってくれました。僕はもうなんといつてこの嬉しさを表せばいいのか分らないで、唯恥しく笑う外ほかありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真赤にして「ええ」と白状するより仕方ありませんでした。

「そんなら又あげましようね。」

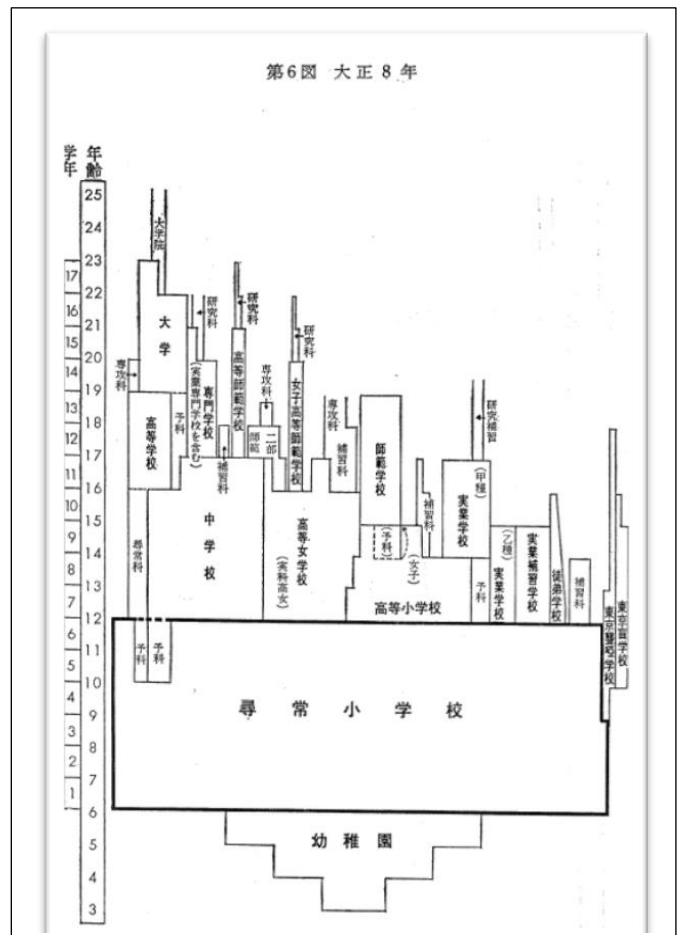
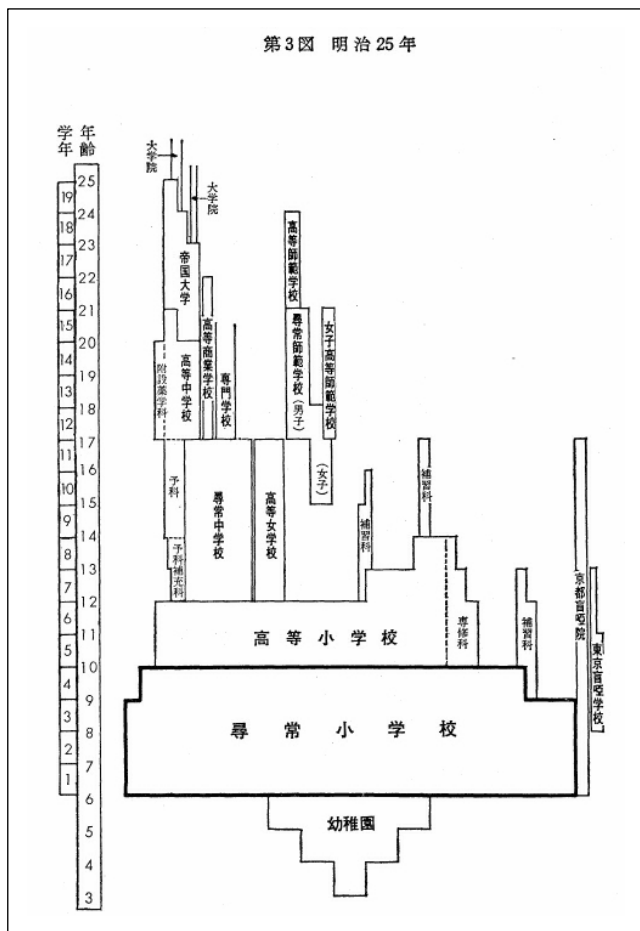
そういつて、先生は真白なリネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真白い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鋏で真中からぷつりと二つに切つて、ジムと僕とに下さいました。

1868~ 明治維新	1886 坪内逍遙「内地雑居未来之夢」
1894-95 日清戦争 1896 徳富蘆花のヤースナヤ・ポリャーナ訪問 1899 内地雑居	1892 北村透谷「厭世詩家と女性」
1904-05 日露戦争 志賀と内村の出会い 賀川豊彦受洗 日露戦後に小学校就学率約 95%	1906 二葉亭四迷「其面影」 1907 田山花袋「蒲団」 1909 夏目漱石「三四郎」
1914-18 第一次世界大戦 (1919 三・一独立運動、五・四運動)	1916 雑誌『トルストイ研究』創刊 1919 島崎藤村「桜の実の熟する時」(刊行)
1931- 満州事変	1920 有島武郎「一房の葡萄」 賀川豊彦『死線を越えて』
1937- 日中戦争	
1941- アジア太平洋戦争	1950 永井隆『長崎の鐘』

リテラシー向上

⑭ 「学校系統図」文部科学省

http://www.mext.go.jp/result_js.htm?q=%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%B3%BB%E7%B5%B1%E5%9B%B3#resultstop (2019.6.5 アクセス)



⑬安藤宏『日本近代小説史』(中央公論新社、2015)

これら四つの潮流が一つに合流する形で、昭和の初頭にはすでに「大衆文学」というタームが定着することになるが、その背景には第二次産業革命、大正デモクラシー、社会の高学歴化などに基づく大衆消費社会の出現があったことはいうまでもない。大正 14 年に講談社から大衆娯楽誌「キング」が発刊されたのは象徴的で、ピラや気球を使った派手な宣伝の結果、創刊号は 74 万部という、当時としては驚異的な部数を売り捌くことになった。講談社の社長、野間清治は「岩波文庫」のアカデミズム路線に対抗して「ローエスト・インテリゲンチャ」すなわち「知」の大衆化路線を宣言したが、それはまた、大正期教養主義を根底から相対化していくきっかけにもなった。

⑭大西春樹『キリスト教学校教育史話』(教文館、2015)

実際、「廻り境界の住民の多くは下町の伝統社会と異なり、新しい社会層に属する人々であった。それは各省庁の役人、政治家、弁護士、検事、裁判官等の法律関係者、医者、学校教師、技術者、新聞雑誌編集者、実業家、軍人及びそれらの予備軍としての大学生、専門学校生、高校生によって構成される『ホワイトカラー社会』であった」。富士見町教会は発展し、1911 (明治 44) 年の教勢は、教員数 1055 名、礼拝出席者の平均数朝礼拝 279 名、夕礼拝 55 名、祈禱会 44 名の多きを数えました。植村の伝道は都市中間層に根を下ろすことに成功し、「大正デモクラシー」の支持基盤を提供したのではないのでしょうか。 ※引用箇所は田代和久「同時代思想家としての植村正久」(石田良一編『日本精神史』ペリカン社、1988)

⑮林啓介『賀川豊彦—時代を超えた思想家—』(賀川豊彦記念・鳴門友愛会、2002)

そのころ兄の端一は兵庫の店から一年に一、二度賀川家に帰ってきていました。そして毎月、巖谷小波が編集をしていた『少年世界』豊彦に送って来ていました。(中略)

先生(篠崎注:片山正吉)はクリスチャンで、その家族も明るく寄宿舎のような乱れた空気はありませんでした。

(中略)

こうした状況の渦中で、1920 (大正九) 年 10 月 3 日に豊彦の出世作となった『死線を越えて』第 1 巻が改造社から出版されました。(中略) 同年 11 月には東京では伊井蓉峰が、関西では澤田正二郎が『死線を越えて』を上演するなど話題を集め、「死線を越える」が流行語になったほどでした。そのため初版発行以来 1 年間で 210 版、105 万部を売りつくしました。

⑯『明治学院百年史』(明治学院、1977)

ヘボン総理が卒業証書を授与した卒業式は、これが最後であった。当日の卒業生として前掲『福音新報』は十八名の氏名をあげているが、「明治学院普通学部一覧」(明治 29 年)には、20 名の名があげられている。(以下、箇条書き)

島崎藤村: 詩人、小説家

和知牧太郎: 牧師

松原茂雄: 愛媛県八幡浜商業学校教諭、伝道者

福間源太郎: 実業家

花島徹吉: 渡米、乳業

星野源治: 神学

赤田開太: 開成中学、成城中学教員

馬場孤蝶: 私立共立学校、日本中学、慶應義塾等教師

岡本敏行 医師、住友生命

高畑宜一: 北鳴学校教師、考古学

奥野武之助：留学、伝道

高崎四郎：実業

戸川秋骨：山口高校、慶應義塾教授

松浦和平：東京高等工業学校教授

比佐道太郎：留学

子安千代松：農科大学助手、高田農学校教授、日本製鋼

友野与四太郎：ホテル、船舶会社

小倉鋭喜：伝道、聖書会社、家塾

富永兵弥：ブラシ製造会社

和田英作：東京美術学校教授、校長

⑮篠崎「温存される〈浦上燔祭説〉—原爆死の意味づけと戦後天皇制をめぐる—」(『社会文学』2013.8)

永井隆『長崎の鐘』に表れた、所謂〈浦上燔祭説〉については、かねてからその政治的な問題性が指摘されてきた。〈浦上燔祭説〉とは、1945年8月9日の原爆投下の目標が「他の某都市」から長崎に変えられ、しかも「雲と風とのため軍需工場」から北にそれて浦上に落とされたのは、「日本唯一の聖地が犠牲の祭壇に屠られ燃やさるべき羔として（神に一篠崎注）選ばれた」結果だとするものである。原爆を「神の摂理」とするこのような言葉が「原子爆弾合同葬弔辞」（1945. 11. 23）の場で永井によって読まれた背景には、原爆を諏訪神社に詣でないキリシタンに下された天罰だと蔑む旧市街からの声があったのだという。浦上の原爆死者を「世界に平和」をもたらすための「貴い犠牲」だとする「切り返し論理」は、そのためにカトリックの信仰を持つ被爆者に歓迎されたのである。不思議なことに、この弔辞を含む『長崎の鐘』、及び永井の多くの著作は全国的な支持を受け、歌や映画とともに一大ブームとなった。

（中略）

ただひとつ気になるのは、これらの明快な批判の中に、〈浦上燔祭説〉の信仰上の価値を担保するような言葉がしばしばさしはさまれていることである。（中略）高橋哲哉も、〈浦上燔祭説〉及び東日本大震災に対する「天罰」論「天恵」論を批判しつつ、「キリスト教など何らかの信仰を持つ人や、思想的あるいは政治的な信念をもつ人が、自らの信仰や信念、価値観に照らして出来事を意味づけることはあっていいし、あるだろう。」との留保を加えている。

⑯遠藤周作「沈黙」(1966)

「わしはパードレを売り申した。踏絵にも足かけ申した」キチジローのあの泣くような声が続いて、「この世にはなあ、弱か者と強か者のござります。強か者はどげん責苦にもめげず、ハライソに参れましょうが、俺のように生れつき弱か者は踏絵ば踏めよと役人の責苦を受ければ……」

その踏絵に私も足をかけた。あの時、この足は凹んだあの人の顔の上にあった。私が幾百回となく思い出した顔の上に。山中で、放浪の時、牢舎でそれを考えださぬことのない顔の上に。人間が生きる限り、善く美しいものの顔の上に。そして生涯愛そうと思った者の顔の上に。その顔は今、踏み絵の木の中で摩滅し凹み、哀しそうな眼をしてこちらを向いている。（踏むがいい）と哀しそうな眼差しは私に言った。

（踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから）

「主よ。あなたがいつも沈黙してられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」